5年A組	【附属編集局　5A情報ステーション】	高石　順弘

1. 単元について

(1)5A情報ステーション

５年Ａ組のみらいの学習「附属編集局　５Ａ情報ステーション」は、なかまとよりよくコミュニケーションしながら、一人ひとりが生き生きと自分らしさを出せる学習となってほしいと考えている。その結果、失敗をおそれず、積極的に活動を進めていく集団・個人となるのではないかと思うからだ。一人ひとりの行動をクラスみんなで認め合い、本気で意見を交流することができれば、個人も集団もお互いを高めあえるはずである。

５Ａ情報ステーションでは、「情報」を柱に、その収集（キャッチ）・編集・発信をしてきた。自分たちで選んだテーマを追求していく中で、いろいろな情報と出会い、その収集・編集・発信について考え、活動を進めてきた。子どもたちはそれぞれ興味関心や得意分野が違う。したがって、扱う情報もいろいろ違ったものであった。その情報を収集・編集・発信するとき、子どもたち一人ひとりの個性が生かされる機会がある。そして、実際に学習を進める個人・小集団グループ活動では、メンバーの協力が必要不可欠となってくるが、協力し活動していく中にお互いを認めあえる瞬間が存在するのである。一人ひとりの個性にふれる瞬間、お互いの思いを出し合うとき、子どもたちはお互いに相手のことをより詳しく知ることになる。そして、その繰り返しが相互理解へとつながっていく。そこで、５Ａ情報ステーションでは、年間を通していくつものテーマに取り組んできた。より多くの子どもたちが活躍できる機会をつくりたいと考えたからだ。また、情報収集・編集・発信の方法も、子どもたちの思いを思う存分出し合う中で考えてきた。子どもたちが本当の思いをぶつけ合い、悩み考えていく中で進む５Ａ情報ステーション、時間はかかるだろうし無駄と見えるような活動も多々あったであろう。しかし、学習が進んでいくその過程にこそ、本当のまなびが存在すると考える。情報を柱に、その情報の収集・編集・発信に取り組む活動を通して、一人ひとりが生き生きと自分らしさを出せたのではないか。素直に自分らしさをだし、なかまと協力し活動を進める情報ステーション。自分を認め、他人を認め、お互い交流しながら高めあう。クラスのなかまと、より深い人間関係がつくられればと願っている。

(2)元気ハツラツ七曲プロジェクト

５Ａ情報ステーションでは「人」「地域」「自然」をキーワードとし、活動を進めてきた。そして、情報を柱とし、それぞれを結びつけていくような活動ができればと考えた。今回の「元気ハツラツ七曲プロジェクト」では、七曲市場を活動拠点とし、市場・お店の人とお客さん、市場・お店の人と地域を結びつけていけるような活動を進めた。「人」と「地域」を情報でつなぐ活動である。そのため、人（お店の人、お客さん）としっかりと関わり（取材・撮影）、その人達の思いを知り「情報」を編集・発信した。その情報をどう地域に生かすことができるか、編集・発信ではじっくり話し合いをさせた。お店の人やお客さんと、また、クラスのなかまたちとじっくり関わることでコミュニケーション能力を培うことも期待していた。

具体的には、七曲市場のお店のＰＲポスター制作とその展示を通しての「市場の活性化」の取り組みである。お店のＰＲポスターをつくるため、グループごと担当のお店に取材に行きインタビューや写真撮影をし、それを持って帰ってパソコンで編集し、Ａ０サイズの大きなポスターをつくる。そのポスターを多くの人に見てもらい、市場のよさを広めようという活動であった。

七曲市場の持つ特性は、子どもたちにとっては身近な食料品の販売を中心としたお店の集まりだということであろう。また、スーパーとは違い、その店には「人」が見えるということも言えるだろう。お店の人もであるが、お客さんも子どもたちから見て目に見える存在である。つまり、子どもたちが市場で活動するとき、お店の人・お客さんとは自然な形でコミュニケーションできた。これは、子どもたちにとってはとても大きい意味を持つ。活動を進めていくなかで、スムーズにコミュニケーションができるということは、子どもたちはよい意味での手応えを感じることになったし、意欲にもつながったようである。市場は、「人」と自然に関わることのできる場である。

また、市場はお店の集まりであり、それぞれ生活を背負ったお店の方の思いを感じ取れる場でもある。お店の方の思いといっても、それこそいろいろあるだろう。しかし、ものを売って売り上げを上げていきたいという共通の思いのほか、それぞれの店の商品・商売方法・仕入れ方法等、いろいろなこだわりもある。そのこだわりを知ることで、そのお店の人に深く関わっていくことができるはずだと考えていた。お店の人の商売に対する思いは、その人そのものを通して見えてくる。その思いが見えたとき、子どもたちはきっと何か感じるものがあるに違いないと考えた。子どもたちが真剣に商売をするお店の人たちの思いに共感することができれば、市場の、いや自分のまわり全ての大人に対する見方も変わっていくだろう。「すごい」という言葉だけでは表せないであろうが、そういう大きな力、奥深さ、真剣さを感じるのではないかと考えた。そういうものを感じると、子どもたちの社会を見る目も変わってくる。表面だけではなく、その奥にある「人の思い」も感じるようになっていくかも知れない。より深い見方で社会を見つめられるようになるということである。市場を教材とすることで、子どもたちが人としてより深い成長ができることを期待した。

そして、市場の今置かれている現状（お客さんの減少、市場内店舗数の減少、スーパー・コンビニの増加等）を知り、それを通して実社会についても考える機会となればと思っていた。市場に来るお客さんは、平日では高齢者の方が多いという。また、足腰の弱い高齢者の方も多いらしい。聞くところによると、ひとり暮らしの方も多いということであった。つまり、このような人たちにとっての市場の役割というのは、スーパーやコンビニでは取って代われないものなのである。すなわち、乳母車を押しながらゆっくり買い物し、品物について話をしながら納得して買い物をするということや、家でいると話し相手のない方が、世間話をしながら楽しみながら買い物をするといったようなことである。市場で取材をする中で、このようなことにも気づき、広く社会を見ることができるようになってほしいと考えていた。

2. 実践の考察

(1)取材を通して

子どもたちは計１０数回の取材を現地でおこなった。はじめは「お店の人と話がうまくできませんでした。なんか緊張したりして・・・次はしっかり質問したいです。」（◇）

と言っていた◇も、取材をこなしていくうちに「お店の人とも何でも話ができるようになりました。時間がとっても早く過ぎる気がします。お店の人とポスターのキャッチコピーについて話をして、これでいいよって言ってもらえてうれしかったです。次は色とかレイアウトを決めて見せに来たいです。」となっていった。そして、「おじさんが言ってたんだけど、お店の品物の仕入れは朝３時頃から始めるそうです。こんなに早くから始めて、新鮮なものを安く売っているんだなあと初めて知りました。お客さんのことを考えると、喜んでもらうためにはしんどくないよと言っていました。プロはすごいなあと思いました。」と感想にあった。店の開いている時間以外のことも知り、お店の人の商売に対する思いに触れることもできたようである。そして、◇は、ただものを買うだけの存在であった「店」に対し、多少なりともその裏側にふれたことで、より深いとらえをするようになったのではないだろうか。これは、◇にとっては社会を見る目が広がったととらえられるのではないかと思う。また、◆は市場は好きだけれど、将来はつぶれてしまうのではないかとはじめは考えていたようである。つぶれてほしいわけではなかったようであるが、取材を重ね、お店の人と話をしていくうちに、次のような感想を持ったようである。「市場はお年寄りの人とかひとり暮らしの人にとってはとっても大切なコミュニケーションの場所です。足の悪いお年寄りには、ゆっくり歩ける市場は買い物がしやすいようです。また、店の人と話をするのを楽しみにしているひとり暮らしの人もいるようで、市場はその人達にとってはなくてはならないものだなあと思います。」（◆）「ぼくたちのポスターを見て、たくさんの人が市場に来てくれるように、いいポスターをつくりたいと思います。そして、いつまでも市場が活気あるようにしていきたいです。」（◆）とある。◆の市場に対する思いの変化を感じることができる。自分が市場に関わっていこうとする気持ちがでてきたように思う。これは、◆の生活テリトリーの中に「市場」が入ってきたといえるのではないだろうか。つまり、◆の世界が広がってきたと考えられる。

（2）編集、発信：ポスター発表を通して

☆は七曲市場には余りなじみがない。しかし、市場を取材し、とても魅力的に感じたようである。ただ、「市場は将来だんだんと店が少なくなっていくかもなあ。」という思いも強く持つようになってきていた。そして、取材していくうちに「○○のお店のおっちゃんは、とても親しみやすい。だから、また来たいなあ～という気になる。△△の人たちは、すごく優しくて常連さんの顔をほとんど覚えている。」と、自分なりの観点で市場の魅力を表現していた。取材内容をもとにポスターを作成しているとき、☆は「○○のおっちゃんの店も人が少なくなってきているっていってたから、何とかお客さんが来てくれるように、目立つものにしたいなあ。で、あのおっちゃんのおもしろさをポスターで表現したいわ。」と言っていた。お店の現状を知り、おっちゃんの人柄を知り、だからこういうポスターをつくるんだ、という思いを持っている。☆なりに深く市場を見ることができるようになってきたのではないだろうか。

★は、市場でのポスター完成発表会とＪＲ和歌山駅地下広場でのポスター展を終えた後、次のような感想文を書いている。「お店の人が言ってくれました、『ありがとやで。ポスター見て、来たでと言ってくれた人が何人かいてたんやで。』と。すごくうれしかったです。お店の人の役に立ったなという思いと、市場の活性化にもちょっとは役に立ったかなと思いました。七曲市場が、これからも元気であるよう、頑張りたいです。いいお店がいつまでも残ってほしいなと思います。」★は、市場に対してそう強い思い入れはなかった

ようであるが、学習を進めるにあたり、市場への思いを強くしていった。その強い思いが、ポスター作成の意欲となって現れてきていたように感じる。★も☆も、お店の人としっかりコミュニケーションできたからこそ、市場への思いを強くしていったのであろうし、句集に対しての意欲を高めることができたのでは、と感じる。

七曲市場を「取材・編集・発信」していくなかで、子どもたちの市場に対する見方・考え方は前述のようにより深いものとなってきたように感じる。しかし、まだまだ表面だけで物事をとらえている子もある。「市場は昔、すごくにぎわっていたんやて。ＰＲポスターできっと昔みたいにたくさんの人が来るなあ。」と、簡単に（本当にそう思っているのかどうかはわからないが・・・）話す子もいる。そうなるように、自分が何をするというわけでなく、ただ単純に「ＰＲポスター＝たくさんのお客さん」という図式になっているようだ。そうなってほしいのは山々であるが、だから何をどうする？と考えを深めていってほしかった。クラスで話し合うとき、こういう子の考えを表に出す機会をつくることを考え、クラスとしてより深い話し合いとしていくことが必要であった。

3. 今後の課題と展望

七曲市場に関しては、作り上げたポスターをいかに活用していくか、が今後のキーになる。「七曲市場の活性化に向けて」という方向を見失わず、子どもたちが話し合いでどういう活用方法を考えていくかであるが、そのとき、個人個人の意識（意欲）の差が大きいことが気になる。意識（意欲）の低い子を、どう高めていくかが大きな課題だと考えている。また、これからは「手応え」を感じにくいかもしれない。しかし、そういう中でも自分たちの活動の方向を強く意識するようにしていくことも課題であろう。

とりあえず、七曲の取り組みはこれで一段落と考える。情報ステーションとしては、今後は「和歌山」を意識し、それを発信できるような「情報」をキャッチ・編集できれば、と思う。そこで、和歌山でもＮＯ，１の集客力がある「和歌山マリーナシティ」を対象に活動を進めていく予定である。「和歌山市」のＰＲ活動をメインとし、具体的な活動の方向を考えていきたいと思う。子どもたちには、今までの取り組みを生かし、よりよい取材・撮影活動を考え実行し、受信者の立場に立って編集作業を進め、よりよい発信方法を考えていってほしいと願っている。そのためには、今までの取り組みをじっくり見つめ直し、何がよくて何がよくなかったのかをクラス全体で考える必要性がある。それには、外部から講師先生を呼んで、客観的な目で自分たちの活動を見てもらい、話し合いの参考にしていく必要もあろう。また、キャッチ・編集・発信、それぞれの部分のプロに教えてもらい、技術面でも研修していくことが必要かも知れない。そういうことを話し合いの中で確かめ合えればと考える。

4. 実践研究テーマの設定

今後、自分としてはみらいの学習の中で「人・地域・コミュニケーション」をキーワードに、学習を進めたいと考える。特に、学校外の地域の人や他の学校の子どもたちとの交流を通して学習を進めていくことにより、子どもたちのコミュニケーション能力を高め、より幅広い視野を持った子どもたちとなるのではないかと考える。そこで、「人・地域・コミュニケーション」のキーワードとともに、「共に生きる（活動する）」ことをテーマとし、みらいの学習を考えていきたいと思う。